

氏名	迫 こゆり	
授与した学位	博士	
専攻分野の名称	文化科学	
学位授与番号	博甲第 6001 号	
学位授与の日付	平成 31 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 (学位規則 4 条第 1 項該当)	
学位論文題目	在ブラジル日本人の異文化適応に関する探索的研究	
学位論文審査委員	教授 田中 共子	教授 上地 雄一郎
	教授 安藤 美華代	准教授 堤 良一

学位論文内容の要旨

本研究は、在ブラジル日本人の異文化適応を巡って展開される探索的研究である。これまでの研究動向を整理した序論に続いて、二つの調査について報告され、最後に総括が行われている。最初の調査では、文化変容態度と異文化適応との関連を、質問紙調査法を用いて調べている。ホスト志向の高さとうつ傾向の高さの間に有意な負の相関を見いだしたことから、ホストの社会と馴染むことが適応のために有利と考察している。続いてブラジル生活で困難を感じる体験とその対処について、詳細な聞き取り調査が行われた。語られた困難には、社会不安の顕著な影響が認められるが、他にも対人面や言語面に関する困難が認められた。困難への対処では、治安・安全対策が重視されていた。対人面の困難に対しては、ホストや同胞など、相手に応じた付き合い方が工夫されていた。適応に役立つ行動的、認知的な社会的技能、すなわちソーシャルスキルとして、社会生活、対人、子育ての三種類のスキルが認められた。なおブラジルの異文化適応において興味深いこととして、ブラジルに居住する日系ブラジル人の心理的機能を挙げることができる。滞在者からみると、彼らはブラジルと日本という二文化を持つ存在と認識されており、支援源にもストレス源にもなり得ていた。以下、本論文の構成に沿って各章の概略を説明する。

第 1 章では、本研究の背景と目的が示され、先行研究が展望されたのち、本論文の構成が説明されている。海外生活は大きな生活環境の変化があることから、メンタルヘルスを損ないやすい状態にある。滞在先の国に適応するには、異文化環境への柔軟な対応が求められる。ブラジルは在外日本人総数が南米一位であること、および経済的な繋がりを背景に、日本からの渡航者や長期滞在者が増加していることから、在外日本人の異文化適応研究にとって注目される地域の一つである。だ

が在ブラジル(以下、在伯)日本人を対象とした心理学の研究はわずかで、分かっていることは少ない。数少ない先行研究からは、適応の難しさや異文化適応にとって望ましい態度への示唆はうかがえるものの、具体的な方法は示されていない。本研究では、心理的および社会文化的という両側面からみた、在伯日本人の異文化適応に焦点を当て、適応の要領を探索する。具体的には、ブラジル生活で困難を感じる体験とその対処について丁寧に聞き取り、適応に役立つ行動的、認知的なソーシャルスキルの抽出を試みる。調査者は実際にブラジルを訪れ、在伯日本人を対象に二種類の調査を行った。一つ目は文化変容態度とうつ傾向に関する質問紙調査(調査1)である。二つ目はブラジル生活での困難とその対処に関する、半構造化面接調査(調査2)であった。最後にこれらの総括を行う、というのが本論文の構成となっている。

第2章では、在伯日本人116名を対象とした質問紙調査の結果をもとに、文化変容態度とうつ傾向の関連について論じた。文化変容態度は従来、母文化とホスト文化を併存させる統合、ホスト文化を中心にする同化、母文化に力点を置く分離、いずれの文化とも希薄な周辺化の四種類に分けられてきた。今回は、統合において最もうつ傾向が低く、分離・周辺化でよりうつ傾向が高かった。統合タイプの適応が比較的良好という結果は、諸外国の研究結果とも一致する。ホスト志向の高さとうつ傾向の高さの間に有意な負の相関がみられたことは、ホスト社会と馴染む方が適応に有利であろうことを示唆する。

第3章では、在伯日本人留学生5名を対象に、ブラジル生活での困難とその対処について面接調査を行い、詳細な語りの分析に向けたSCAT法を用いて分析した。彼らは渡伯当初、不安定な治安に困難を感じたが、滞在中に適応的な行動を学び、安心感を高めていった。ホストの異文化性、すなわちブラジル人らしさに対しては、明るく親切な印象で好感を持つものの、価値観や習慣の違いにはストレスを感じる場合があった。総じて日系人は留学生活の支援源となっており、留学生にとっては親しみと好意の対象として大きな存在感を持っていた。ブラジルで体験した困難への対処を整理していくと、馴化的・主張的・自律的・依頼的・気分転換的対処にまとめられた。すなわち受け入れる努力や働きかけ、調整や援助の依頼、気分転換などが、社会文化的文脈に合わせて繰り返されていた。

第4章では、対象者の範囲を広げて、在伯日本人の会社員や主婦ら15名を対象として、ブラジル生活での困難とその対処について探った。個別性を持った現象の流れを整理することに適したM-GTAを用いて、分析を行った。在伯年数の長短や属性に関係なく、社会不安に関わる困難が認められた。他にはホスト言語や英語の理解と習得の仕方、ホストの習慣・価値観の違い、子どもの安全と充実した生活の維持に困難がみられた。対処の仕方は留学生の場合と重なるが、家族や同胞と付き合うための対処が加わっている。当該社会の社会文化的文脈の中で過ごす要領として、大きく分けて社会生活、対人、子育てのソーシャルスキルを考えることができる。各々に行動的、認知的なスキルが見いだされた。

第5章では、ブラジルでの異文化適応に特徴的な現象として、在伯日本人と日系人との関係性に焦点を当てた。在伯日本人は、日系人をブラジル生活の良き支援者とみなす一方で、付き合いがストレス源にもなると認識していた。すなわち日系人の存在感は、両面的ともいえる独特なものとい

える。滞在者が、ブラジルと日本の二文化を持つ日系人の特質を理解し、付き合いの選択や距離の調節をすることができれば、ストレス源となる可能性を減らしながら、支援源としての機能を活かすことができるのではないかと考えられた。

第6章は、全体を総括して今後の課題を述べた。ソーシャルスキルについては、第4章で示されたスキルのリストをもとに、第3章と第5章で見いだされた、日系人と良好な関係を保つための方略を含めて整理した。今回の研究では、ブラジル滞滞在者が現実に体験した困難から、具体的なスキルを呈示することができた。ブラジルでは、ホスト社会に馴染むことが適応に有利と考えられるが、その社会で安全に暮らすためには、危険を避けながら生活を成り立たせるサバイバルのスキルが必須になる。適応の支援源となる日系人と良好な関係を保つためには、彼らの二文化性に配慮する必要がある。これらをブラジルにおける異文化適応の要領として、認識しておくことが必要である。今後はさらに精緻な質問紙調査や、ソーシャルスキルの事前教育および実践結果の追跡調査などに、研究展開の可能性が考えられる。

学位論文審査結果の要旨

学位論文の審査においては、最初に本人から、予備論文の時点から何をどう変えていったかという改稿に関する説明があった。訂正箇所一覧が示され、成果を発表した刊行論文について説明が行われた。そして予備審査で質問された事柄に対する回答があり、その後、本論文に関する質疑応答が行われた。

最初に問われたのは、ベースにした四セルモデル以外の理論による解釈の可能性、質問紙の項目設定の仕方とその適否の評価、結果の弱い部分への解釈の仕方、分析手法の選択、表と本文の文章表現との不一致、ストーリーラインの記載、今回の対象者に独特の結果がどこにみられるかなどである。次に、同じ段落内での書き方の不統一の指摘のほか、対象者の属性と状況、日系人から見てホストとエスニックが何を意味するのかという用語の使い方、削除された項目、現地言語での表現の意味、属性の影響に関する確認、および先行研究と対比した考察、手法の選択理由に関する質問があった。さらに本研究の課題として、調査対象の限定性や結果の弱い部分への言及、手続きや検討の途中経過の加筆、文末表現を見直して意図を結果や考察と書き分けること、因子構造のさらなる検討、日系人の微妙な立ち位置を反映させる分析の工夫、より丹念な項目の準備と選択、結果記載における的確な主語の挿入、表中の記号や数の表記における注意、結果の数値の解釈と文章での表現方法、結果から読み取れることと合致した考察の文章、属性による差異の予想、インパクトを持たせた総合考察の構成について、吟味する必要が指摘された。そして研究の今後の展開として、日本にいるブラジル人の適応支援が期待されるとのコメントがあった。

これらの質問やコメントに対して、申請者が応えていった。手続きや属性、手法の選択などで、十分表現できていなかった箇所には補足の説明が行われた。調査の意図や記載の狙いが説明され、正確な表記や表現の吟味について、考えられる修正の方法が述べられた。他に試してみた分析やその結果、検討はしたが採用しなかった解釈や代替モデルの可能性、データの意味するところなどに

ついて、申請者の考えが述べられた。今後の研究展開については、現地での調査規模の拡大と、調査地域の多様性の確保がまず必要と認識されており、在日ブラジル人の問題が、今回の反転現象として興味深いという点で見解が一致した。

予備論文審査時点での指摘に対しては、比較的良好に直している章と細部に課題が残る章があるが、改稿の努力が成されたことが確認された。近隣なら頻回調査による緻密な点検が可能だが、地球の裏側のフィールドでの限られた貴重な機会を活用した調査であり、後続調査に期される部分を残している。しかし研究の端緒を開く意義は高く、その開拓性と新奇性は、所属学会における優秀論文賞としての評価に繋がっている。今回の主な成果は、滞在者の困難と対応させて具体的なスキルが呈示され、後続渡航者の役に立つ示唆として教育応用に道を拓くものであること、そして日系人の独特な機能を見だし、異文化適応研究としても新たな知見を示したことにあると考えられる。残された課題は、先の展開への期待と捉えられよう。全員一致で、博士の学位に値する研究として認められる、との結論に達した。